



大家族の絆や高浜市で暮らす日常の「心地よさ」が感じられるまちをめざして

吉岡初浩市長 2期目への決意

去る8月の市長選挙で再選を果たした吉岡初浩市長。9月9日から2期目がスタートしました。1期目の成果を振り返るとともに、2期目への決意について、お伝えします。

これまでの4年間を
振り返って

1期目(平成21年9月)の就任当時、どんな想いで市政運営に臨んだのですか？

前年の秋のリーマン・ショックに端を発する経済危機の影響をまともに受け、厳しい財政運営を迫られました。

しかし、むしろ、危機の時にこそ、将来に向けた市政運営の基盤をしっかりと固めることができ、次の成長につながると考え、「高浜市の根っこづくり」に取り組みました。

例えば、どんな取り組みですか？

市政経営の根幹となる「自治基本条例」や「第6次総合計画」の策定、今後の高浜市を支える人づくりの礎となる「生涯学習基本構想」や「教育基本構想」の策定、将来の公共施設のあり方を考える基礎となる「公共施設マネジメント白書」の作成、「公共施設あり方検討委員会」による基本方針などのとりまとめ、地域防災を構築するうえで必要となる「防災ネットワークづくり会」の立ち上げなどに取り組みました。

この4年間で、高浜市がどのように変わってきたと感じていますか？

例えば「総合計画」について

は、市民の皆さんと市役所職員約150人が膝を突き合わせ、120回以上もの対話が重ねられ、素案を練りあげました。

また、市民映画「タカハマ物語」の制作では、出演者・裏方・協力者など、老若男女、約6千人の参加をいただきました。

これらはほんの一例ですが、「かかわる」の中から、新たな気づきや、まちづくりの原動力となる「まちを愛する心」が芽生え、人と人がつながる新しい輪も次々と生まれていきました。



吉岡市長のモットーである「現場主義」を体現するような取り組みですね

私は、信頼される行政をめざして、「市民にとって真に必要な施策は何か」を常に問い続け、市民の皆さんとの対話を大切にし、ともに汗を流してきました。

職員にもそうした意識が浸透し、「職員も地域の一員」という自覚が芽生え、積極的に地域活動に参加するなど、市民の皆さんとの距離も縮まってきたように感じ

ています。

「誠実さ」を大切にし「現場主義」を徹底するという原点は、2期目も変わることなく、堅持します。

